

障害者の職域拡大

～福祉職員だった私が、当事者になって今できる事～

○岩崎 宇宣（相模原市社会福祉事業団 障害者支援センター多機能型事業所 生活支援員）

○杉之尾 勝己（相模原市社会福祉事業団 障害者支援センター多機能型事業所 利用者）

1 はじめに

発表者の岩崎は社会福祉法人相模原市社会福祉事業団障害者支援センター多機能型事業所（以下「事業団」という。）就労継続支援B型事業（以下「就継B」という。）の担当職員、共同研究者の杉之尾は事業団の就継Bに通所している利用者であり、この両者の検討と現状を報告する。

2 背景と目的

共同研究者の杉之尾は、約27年間、障害者施設の職員として勤務し、2016年脳出血を発症、その後、後遺症で麻痺が残り、事業団の就継Bに通所する事となった。職員と利用者という両方の立場を経験し、その経験をどこかで活かすことができなかと日々模索している。

障害福祉サービスの利用にあたっては、個別支援計画をもとに計画の目標に向けて、日々活動に取り組み、サービス提供側も同じく目標に向けて利用者支援を行うこととなっている。現在の杉之尾の目標は、「通所をしながらオンブズマンの手伝いのような仕事ができるようになる」というもの。杉之尾の担当職員である岩崎は、そのような杉之尾の思いを個別支援計画素案作成の際に知り、支援者としてどのようなことができるのかを模索するようになった。

(1) 杉之尾：学生時代

福祉専門学校時代に先輩からの誘いで「障害者の自立を考える会二人三脚」という活動に、ボランティアとして発足の準備段階から参加した。「障害者の自立を考える会二人三脚」は、重度障害者が行事を通して自立について考え、話し合うという取り組みであった。その中で、利用者から障害者の現状を初めて聴き、重度障害者が社会で自立をする難しさを当時は感じた。具体的活動は、ワープロ学習会や電車のラッシュアワー体験、ディズニーランドへ行く等、重度の障害者が普段できないがやってみたいという要望に応えるべく、ともに活動し挑戦した。

そのような取り組みを行っている中、現在目指す事のきっかけとなるとも印象深い出来事があった。それは家族が体調不良となった利用者が、緊急で入所施設を短期利用した時のことである。利用後、その利用者から「利用中に窮屈な思いや嫌な思いをし、2度と利用したくない」と必死に訴えがあった。その話を聴き、利用者や職員で話し合い、重症障害者が入所施設以外に宿泊利用できる場が少ない現状や、利用者の親なき後の居所に対する心配の声が

あがり、自分たちでグループホームを作ろうという事になった。その後グループホーム学習会が行われ、グループホーム利用のために、食料の買い出しや料理等、グループホームに必要なスキルを職員と共に練習した。学習会を重ね、紆余曲折あったがなんとか皆が理想とするグループホームを設立することができた。

(2) 杉之尾：職員時代

専門学校を卒業後、新卒で社会福祉法人に入職し、約27年間障害者施設の職員として勤務をした。入所部門配属時担当利用者の中に、強度行動障害の方がいた。強度行動障害者の中には、伝えたいことをうまく伝えられない、コミュニケーションを取ることが苦手、行動に強い拘りがあり新しい場面や行動に移ることが苦手等の要因から、気持ちが不安定になり混乱し、大声をだしたり、自傷や他害等という表現で気持ちを表出する事があった。支援に対する専門的な知識や、権利擁護に関するしっかりとした知識がなかったため、そのような場面で威圧的な対応や、安全のためといいながら安易な身体拘束をしていた。その時はおかしいなと少し疑問を感じながらも、周りの職員も同様に行っている環境から同調圧力を感じ、職員にとっての楽な支援をしていた。

(3) 杉之尾：発症

2016年に脳出血を発症し、左半身が麻痺となる。要介護2の認定を受け身体障害者手帳を取得した。受傷直後は、声はでるが、うまく言葉がでない時やうまく相手に伝えることができない場合があった。言いたい事が理解されない苦しみを直に体験する事となった。

そのような経験をし、職員時代に支援をしていた利用者も伝えたい事がもっとあったのではないかと、利用者の思いをしっかりと受け止めていなかったのではないかと、職員にとっての楽な支援を行っていた出来事が大きな疑問となり心残りに変わった。

(4) 目的

杉之尾は施設の通所者となり、学生時代の活動を思い出し、職員時代の自身の支援を振り返り、通所者だから感じることを改めて考えるようになった。その中で「障害者の権利を守り、自分自身で選択をして生活や仕事が当たり前のようにできる社会を目指したい」という思いに至り、そのためには、利用者と職員がボランティア時代に経験したように共に歩むことが大切だと考えた。

同時に、岩崎は杉之尾の個別支援計画の「通所をしなが
らオンブズマンの手伝いのような仕事ができるようになる」
という目標の背景には「障害者の権利を守り、自分自身で
選択をして生活や仕事が当たり前のようにできる社会を目
指したい」という思いがあると知り、オンブズマンの手伝
いのような仕事以外にも、杉之尾の強みや経験をどこかで
活かすことができないかと地域の資源を調査研究した。杉
之尾の性格は穏やかで、人の話を聞く事や、他の利用者が
困っていることを職員に伝えることも得意だ。

地域の資源としては、通所先である事業団は、相模原市
にあり、相模原市福祉オンブズマンネットワーク（地域
ネットワーク型オンブズマン）、相模原市障害者自立支援
協議会等、障害者や関係機関が連携、情報共有することで、
障害者の支援体制を構築していく資源が活発に活動してい
る地域である。そのため、そのような機関に杉之尾が参加
することで、杉之尾が望む活動が実現できる場が生まれる
可能性があると感じた。

3 現在の取り組み

個別支援計画をもとに長期目標を達成するため、杉之尾
と岩崎（支援者）が支援内容や課題に対しそれぞれ取り組
んでいる。杉之尾が取り組むこととしては、障害者の権利
擁護に携わる者として必要なスキルを身につけることを目
的に、①記録記載のためパソコン入力能力を高める②権
利擁護について自主学習する③面接スキルを向上させる
（訪問リハビリによる発声練習、カウンセリング力を高め
るためのヘルピングスキルの学習等）ことを努力すること
とし、一方岩崎（支援者）は、①オンブズマン以外に杉之
尾が携われる機関を探し、②杉之尾自身が努力することの
支援を行うこととしている。

4 今後の取り組みと目標

「3 現在の取り組み」をさらに発展させるために、杉
之尾は、通所の活動場面で、他の利用者の思いを代弁す
ること、岩崎（支援者）は新たな機関の開拓を行っている。
相模原市の福祉オンブズマンネットワーク事務局や通所先
に派遣されているオンブズマンに杉之尾の思いを伝え、杉
之尾がオンブズマンとして活動できるか投げかけていると
ころである。また、先日は相模原市障害者自立支援協議会
の傍聴を行い、杉之尾自身が参加できることを模索してい
る。岩崎はピアサポーター制度等を研究し、杉之尾が活躍
できるかどうかを調査しているところである。

このように、現在調査を実施している最中であるが、杉
之尾が本当に望む活躍の場を提供することができるかは確
証がない。また、今現在、杉之尾の目標達成のために関
わっている機関は事業団のみであり、一施設の力には限界

を感じる。杉之尾が望む場が見つからない場合は、杉之尾
が学生時代取り組んできたように、一人の利用者の思いを
関係機関と共有、連携することで新たな資源の構築にむけ
て取り組む必要がある可能性があることを留意しておかな
ければいけないと発表者は感じている。